

置場の南の石垣が神楽寺通路と林家との境界であったようである。五丁目の屋台蔵も林屋敷の一部で、明治中頃は消防器具庫だった。屋台蔵はそれ以前は早川泰・高橋滝蔵（高橋屋）両家所有地に跨がってあったのを移転したのである。

○句碑 濠の太鼓橋右前方に、芭蕉の十六夜塚並びに勇水句碑が立っていたが、後にそれぞれ現在地に移された。橋左方の水屋あたりは元両大師があった。慈恵（元三）・慈眼両大師で、神楽寺で達磨市のたつ正月三日の「大師様」はこの元三大師の縁日である。

○石造障屏 最近まで狛犬石像の後ろにあった。明治十六年ガス灯用に建てられたものであるが、参集殿建築に際し撤去してしまった。

○楼門 通称「仁王門」で、伊勢崎藩儒村士玉水の筆になる放生楼の額は、今でこそ裏面に移されているが、明治以前は正面に掲げられ、門名の基づく仁王も矢大臣・左大臣の前住だったのである。前の堀のすぐ南には一対の石灯籠があった。存在したしるしに、筆者の子供の頃には、まだその台石が残っていたものだが、いつの間にか消えてしまった。

江戸時代、鐘楼の鐘撞きは、日露戦役記念碑付近にあった万日堂が世話していたが、これがこの界隈の「時の鐘」にもなっていて、野良稼ぎや養蚕仕事の始め終りの合図にもなり、表の街道を急ぐ旅人の足運びの目安にもなっていたのであろう。

そもそも、この鐘は第二次世界大戦時供出した嘉永元年（一八四八）の鐘の銘によると、最初のもは第五代住職尊照の延宝（一六七三―八〇）の時代に成ったのであるが、一七〇年も撞き続けひびきを失ったため、第十五代伝海の世万日堂主の発願で鑄造し直した。その時は玉村宿中は勿論伊香保の木暮武太夫を始め新町・板井・上福島等の村々からの協力も得られた。それには神楽寺と八幡様とが一体だったという当時の宗教形態も与っている。これが嘉永元年落成のもので、約一二〇年間太平洋戦争まで鳴っていた。撞く時刻は、古くはつまびらかでないが、文政三年（一八二〇）八月鐘楼が新築された時から、五丁目の沢屋兵左エ門（文化財委員井田二郎氏の先祖）寄贈の米国製時計によったので、割合正確な時を知らせたのであろう。鐘撞きの人件費は万日堂所

か消えてしまった。

○禁札 我々の見たのは楼門の東手前のもので、戦後は取り払われ、禁札を立てた小石壇のみが他所に移されて残っている。

○琴平大神 丸山社家の西北に小祠として祀られていた。

○大鳥居―楼門間 参道の左右に杉並木があった。近頃の水道工事に、その大木の根っこが掘り出されたという。

○天王様 その位置は、明治以降巡査分署（或いは駐在所とも）が設置された西南の角にあった。五丁目の八坂大神で、市の神として祀られていたのである。現在は、本殿の東北裏に五・六・七丁目の天王様の石祠が末社として建てられている。

時の鐘

昭和四十九年以来、下新田の神楽寺から朝夕鐘の音がひびいてくるが、この神楽寺は元は玉村八幡宮の別当寺だった。その名残りが、八幡山神楽寺という寺号や、八幡宮楼門の呼び名「仁王門」・前庭東側の鐘楼跡石壇（現在は崩されてない）などにみられる。

有地約一町分が特別にあてがわれていたのである。

神楽寺では、昭和四十九年十一月、供出鐘の後釜に、壇信徒の拠金で新しいのを鑄造した。鐘での時報こそ今日さまで必要なくなったとはいえ、新鐘以来、清純な子供たちの奉仕で打ち鳴らされている諸行無常、寂滅為楽の鐘の音は、ともすれば迷いがちの我ら町民の心を、自ずと洗い清めなごませてくれているのである。

風に鐘の天女は身構へず 光三子

御殿稲荷

現在は五丁目片岡屋呉服店裏にもぬけの祠のみとなった御殿の稲荷の発祥は、旧中学校舎の裏手の田圃なかつた。小字名も御殿である。江戸初期慶長年代、天狗岩用水を総社町から延々玉村地区まで開削して開田、後の玉村町発展の基礎を築いてくれた関東郡代伊奈備前守忠次の陣屋の所在地だったところからこの称がある。居所を設けたのは、そこが中世の環濠屋敷跡だったらしいからであろう。環濠屋敷は今の玉村高校敷地も和田与六郎（後早川と改姓）のもそれであり、玉村八幡宮境内も同